江戸版浮世草子『好色三人紅（好色三人もみぢ）』（巻一・二）

― 翻刻と解題 ―

藤原英城

はじめに

本稿は貞享末・元禄初期に刊行されたと推定される江戸版の浮世草子『好色三人紅（好色三人もみぢ）』（巻一・二）の翻刻と解題である。『好色三人もみぢ』は仮題だが、『好色三人紅』の後印修訂本で、その巻一に相当するものと見なされる。次にそれぞれの書誌を記す。

〔書誌〕

好色三人紅　刊本　半紙本　巻二、一冊　架蔵本

表　紙　縹色無地原表紙。縦二二・五糎横一六・〇糎。

本　文　四周単辺。縦一九・一糎横一四・三糎。半丁十一行二十字前後。目録は半丁七行十字前後。

構　成　全十五丁（目録一丁「一」、本文十四丁「二～十五」）。

挿　絵　見開三面（二ウ三オ・六ウ七オ・十一ウ十二オ）。

題　簽　書題簽中央「師宣／好色三人紅／弐一冊」。

目録題　「好色三人紅巻之二三目録」。

板　心　「三人二　（丁数）」。

句　読　「○」は「一～三・六・九・十・十五」、「●」は「四・五・十一～十四」。「七ウ・八ウ」は両点が混在。

作　者　未詳。

画　者　菱川師宣風。

刊　記　未詳。ただし、貞享末・元禄初年頃刊か（〔解題〕参照）。

諸　本　○版　本

（イ）初印本　架蔵本。

（ロ）後印修訂本　京都府立京都学・歴彩館蔵本（和／913.52／N48）。初印本との主な相違点を次に記す。

男色物（仮題）　半紙本　巻不明、一冊

表　紙　茶色無地原表紙。縦二二・八糎横一五・八糎。

本　文　四周単辺。縦一九・〇糎横一四・三糎。

題　簽　題簽剥落（左肩）。内題・目録題・柱題等なし。

板　心　「　（丁数）」。

備　考　見返し・裏見返しにそれぞれ次の墨書き入れがある（改行を／で示す）。

（見返し）「よひまち／夜中わくらみ／あか月わ暮ぞ／みんとてしはし／まとろむ／印（方印・陽刻「恵」）」。
（裏見返し）「延享四年／丁卯六月廿五日」。

○写　本　京都大学大学院文学研究科図書館穎原文庫蔵本（国文学／穎原文庫／Pe／54）。歴彩館本を底本とする透写本と推定される。版本との主な相違点を次に記す。

逸題浮世草子（仮題）　半紙本　巻不明、一冊
表　紙　緑色地七宝繋ぎ艶出し後表紙。縦二三・六糎　横一六・八糎。
本　文　無枠（ただし、挿絵「十二オ」のみ四周単辺）。
構　成　全十七丁（扉一丁、遊紙一丁、目録一丁「（なし）」、本文十四丁「二～十五」）。
挿　絵　見開三面（二ウ〔空白〕三オ〔空白〕・六ウ〔空白〕七オ〔空白〕・十一ウ〔空白〕十二オ〔一部転写〕）。
題　簽　書題簽左肩「逸題／浮世草子／零本」。
扉　題　「題名不詳」。その他、内題・目録題・柱題等なし。
板　心　「　　（丁数）」。
備　考　扉ウラには穎原退蔵氏による次の書き入れがある。

竹之介トイフ美少年トおさんトイフ娘ノ恋物語ナリ、本書ハソノ第一巻トオボシ。中ニ浅草観音ノ縁起ヲ事長ク説クナド単純ナル浮世草子トハ思ハレズ。或ハ浮世草子ノ趣向ノ間ニ観音ノ霊験、艶書ニ事ヨセ古歌ノ智識ナドヲ教ヘントスルモノニ非ルカ。刊行年代ハ元禄宝永ノ交ナラン。

備　考　・「表紙」は裏表紙による（オモテ表紙は表面が剥落し、縹色の紙片がわずかに残る）。
・表紙に三種類の図書ラベルが貼付され、「ハモノ画三枚」との書き入れがある。
・見返しに手書きアルファベットによる蔵書票が貼付されている。
「Kôshoku sannin Kurénaé ／ Roman L'mour ／ 1vol.Hishikawa ／ San/Lâte ／ (17e, siècle)」。
・背表紙に手書きで「HISHIKAWA」の紙片が貼付されている。

余　説　後述するが、堤精二氏「江戸版『好色一代男』覚え書」（『西鶴論叢』中央公論社、昭50）に、氏の架蔵本『好色三人紅』巻一・三の内容が一部紹介されており、次に記す『好色三人もみぢ』零本一冊の内容と巻一が一致する。『好色三人もみぢ』は『好色三人紅』巻一の後印修訂本であることが

予想される。

好色三人もみぢ（仮題）　版本　半紙本　零本一冊

表紙　紺色雷文繋ぎ地に唐草空押し後表紙。縦二二・三糎横一五・九糎。

本文　四周単辺。縦一八・三糎横一四・三糎。半丁十一行二十字前後。

構成　全十七丁（本文十六丁半「（二丁分破損）・五・六・六（ママ）・七・九～十三・十八・十五・十四・十三・十七・（破損）〔オ〕」）。

挿絵　見開三面「（不明）ウ（不明）オ・六ウ七オ・十五ウ十四オ」。

題簽　題簽・内題・目録題・柱題等なし。

板心　「　　（丁数）」。

句読　「○」は「（最初の二丁）・五・六・九・十一・十三・（最終丁オ）」、「●」は「六（重複する後の丁）・七・十・十三・十四ウ・十五・十七・十八」。「十二ウ」は両点が混在。

画者　菱川師宣風。

備考　・巻は相違するものの、板式（柱題の削除等）や画風が歴彩館本と共通することから、本書は『好色三人紅』の後印修訂本と見なされる。

・渋井清氏旧蔵本（蔵書印）。同氏「元禄文学の構造」（『言語文学芸術』河口真一教授還暦記念論文集刊行会、昭37）には氏の「新収江戸板好色本」として「好色三人もみぢ」の書名が挙げられている（冊数等は不記載）。本書の命名は渋井氏によるかと推測され、次に記すメモ書きも同氏の手になる可能性があろう。

・旧蔵者によるペン書きで「好色三人もみぢ／㊤、中、下」と記されたメモ紙片が挟まれており、本書の仮題として『好色三人もみぢ』を採用した。

・丁付は乱れているが、乱丁ではなく、また落丁もない。現状で文脈の不整合は認められない。

・全体に破損個所が散見され、特に巻頭の二丁分にその程度が甚だしいが、いずれも裏打ち補修がなされている。

・前掲堤氏によると、巻一には序が付されていたことが分かるが、『好色三人もみぢ』には確認できない。本書は改装本のため、その際に目録とともに序が脱落した可能性があるが、巻は相違するものの、原装の修訂本である歴彩館本には目録が存することから、後印時に改題され、序だけが欠丁となったことも予想される。

〔梗概〕

本書の内、『好色三人紅』巻二は『浮世草子大事典』（笠間書院、平29）に紹介したが、その巻一に該当する『好色三人もみぢ』は未収録のため、以下に簡単な梗概を記す（巻二は再録）。

巻一

（一）江戸本郷湯島の辺で炭・薪などを商うやまとや九郎右衛門には美男の息子角次〔二〕郎がいたが、息子に嫁を迎えて間もなく病死する。それより角次郎は吉原遊びを覚え、遊女小てうに入れ揚げる。お

ばの看病で角次郎がしばらく家を留守にする間に、悋気した女房は角次郎の偽文を小てうに届け、病で角次郎に余命のないことを告げる。（二）角次郎の手紙を偽りとは知らない小てうは世の無常を観じて自害する。（三）看病を終え帰宅した角次郎は早速吉原へ出向くが、小てうの死を知らされ、女房の計略と悟った角次郎は女房を刺し殺す。角次郎は二女の菩提を弔うために出家し、京都を経て高野山に庵を結ぶ。

巻二

（一）江戸すじかい橋辺りに住む浪人松島宮内左衛門の一子竹之助〔介〕は一六歳、今業平と噂される美若衆であった。ある日浅草観音参詣からの帰途、突然の雷雨に難儀し、駒形堂前の門構えある家に雨宿りを請う。宿の亭主から濡れ帷子の着替えを勧められた竹之助は、娘おさんの粋な大振袖を借り受け、まだ見ぬ恋に落ちる。（二）宿の亭主山尾何某の娘おさんは和歌の素養もある艶女だったが、濡れた帷子の取り換えに竹之助を垣間見てより恋心となり、恋文を竹之助の帷子に縫い付けて返す。雷雨の間、座敷では亭主が浅草観音の縁起を語り、竹之助は帰宅する。縫い付けられた文を読んだ竹之助の思いはますます募り、おさんに逢瀬を求める手紙を届ける。おさんは文面に赤面するも、事情を知らぬ取り次ぎの腰元の面前を取り繕う。

〔翻刻〕

一、翻刻にあたっては、原則として現行通用の字体に改めた。ただし、当時慣用と思われる漢字表記などについては、そのままの残したものもある。

一、特殊な合字・連体字は通行の仮名に改めた。

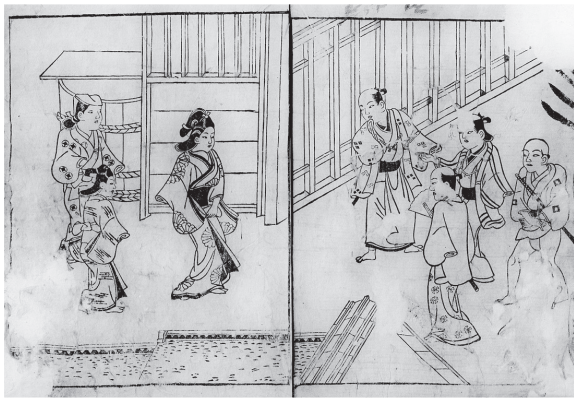
一、濁点については、明らかな誤刻は訂正した。

一、句読点は「○」に統一した。

一、丁移りは、丁付と表・裏（オ・ウ）を括弧に入れて示した。

一、破損個所は文字数相当に□を付したが、部分的に文字が推定される場合は内部に記した。

一　行末（ゆくすへ）しらぬ二道（ふたみち）のあだ人



第一図　第二図

いにしへのけんじんは。しせんにとゝまつて天下国家（こくか）をしづかにし。いまどきのやぼてんは。こひかづをしこなせり。こゝに江戸ほんがうゆしまのへんに。やまとや九郎右衛門とて。すみたきゞなどあきなふて。手まへもとぼしからざる町人（まちにん）あり。其子（こ）□□角（かく）次郎とて。つもるとしは廿一。きりやう人にすぐれてびなんなり。女こ（をんな）ろしのなりひらも。かれがまへにては。かほをあかめて□□しはいそであるらん。はゝはみとせいぜんに身（み）□□かり

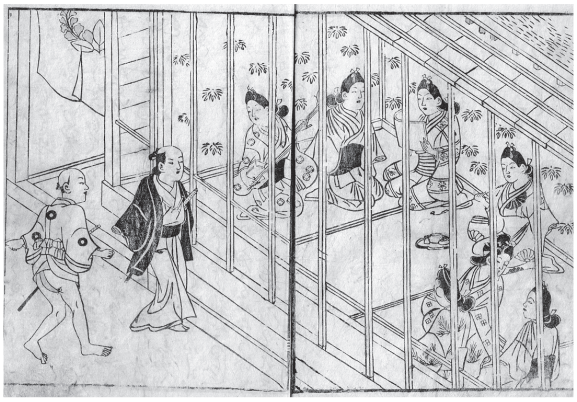
て。今はしんぶばかりにて。い□□□□みあ□□すこゝ□（□オ）

挿絵第一図（□ウ）

挿絵第二図（□オ）

やすきちいんきたりて□もはや角次郎との□せいちやうのことなればば。おなひぎさまをよんで□さしやれませいなどゝ。しば〳〵い□れば。しんぶももつともとおもひ。さるらうにんの。ぞくしやうもいやしからぬものゝ。むすめをめとりてげり。よそをいは。十六の月にひとしく。こゝろざまゆふにやさしく。さゝげのとしに。ひとつあまれり。いもせのちぎり。あさくはあらぬ山の井の。水もなか〳〵もりがたし。まことにさだめなのうき世や。さいつころより。九郎右衛門ひだりのわきのしたに。ようそとかやいふ。しゆもついできぬ。常（□ウ）づねいでいりする。だうちくなど。いろ〳〵とりやうぢを。つくせどもかなはず。なかば百日ばかりのいたわりにて。五十六のあきのころついにくわうせんにおもむきぬ。角次郎ふうふのなげきかきりなく。だんなでらへなく〳〵をくりぬ。これより角二郎こわきものはなし。金はくらにうならぬかふしぎとやいわん。より〳〵さんくわひする。ちくばよりのともたち。いづれもどうねんころにて。けつきさかんの。とびあがりどもなり。かけろくならば。井のうちへさかさまにも。とびこむへし。しゆけうのあまりには。角次郎ところへきたりて（五オ）おみはいかに。おないぎがあればとて。わかふてゐながら。千金にもかへがたき。よしはらといふ。おもしろき。いろざとへは。ゆきやらぬぞ。にようぼうはふるしなど。とんてきにまかせて。たび〳〵たはれければ。角次郎もさすが。にようぼうのまへをはゞかり。はじめはいなみけるが。のちには一はいきげんになりては。それもそうなり。わざくれ女ぼうはだいじかさ。なといふにつのり。いよ〳〵そゝのかしければ。いかにもいつの日に。一どうすべしと。にちげんいゝかわし。みな〳〵いゑにかへりけり。さいはひだうより。をこることわりを。しらざるみ（五ウ）のゆくすゑこそ。はかなけれ。すでにその日になれば。れいのうわきものども。おもひ〳〵のいでたちにて。角次郎殿。さあをしたくはとて。さそひにきたれり。角二郎にようほうかまへをば。あさくさくはんおんへまいるとていつはり。おとこぶりをひとしほみがき。だてなしやうぞくにてつれだちゆく。ひろい江戸のじゆうさ。なにしあふたる。こひをこしらへて。なさけうるいろさとの。さとり心の通りしなもの。だてものぬれものに。大門くちをふる程に。いづれもをのれ〳〵が。ふかまへあがりぬ。角次郎は瀧兵衛一人ともにつれひやうご（六オ）やがかうしを見てあれば。はなをねたむぢようらうたち。十人ばかりなみゐつゝ。さみせんいまやううき世うたわがたましいも。あのきみたちの。そでのうちにやいりぬらんと。うたがはしきほどなり。ひだりから三ばんめのちようらう。とは二八にひとつふたつもこへつべう。よそをいけだかくして。たんくわのくちびる。ふようのまなじり。誠に呉をかたぶけし。せいしもこれほどにはあるまじと。ぎうとやらんに。あのぢようらうの。おなはとふたれば。あれこそ小てうさまと申まして。たゞいまときめきたまふ。御かたなりとこたふれば。角次郎（六ウ）おもふやう。さても〳〵きのとをりたる名かな人間はこてうの身。たれか百年をたもたん。ひとゝきのしよわけもおもしろし。わがあはんとおもふは。此きみな

らではと。それよりいとかりそめの。にいまくらをかはしまの。ふかきちぎりとなりゆきて。たがいにゆきかふ。ちつかのたまづさは山をなし。女ぼうにふかくつゝみてしのびぢの。どてのあをくさも。ふみふるす。さるによつて。にようぼうとねやのつとめもうとくなり。ふたりならびしとこに。ひとりねの。ゆめもけうとくふくりうする。にようぼうこゝろのうちもにくからず。人の心のうつりかはる（六オ）



第三図

第四図

挿絵第三図（六ウ）

挿絵第四図（七オ）

をおもへば。やるせなきこゝちぞせらる。こゝにめくろのほとりに。さわ井かじゅんとかや。いへるいしや有。角二郎がをぢなり。あるときこれより。つかひきたり。きうをつけていはく。二三日いぜんに。ないしつ。しやうさんをいたし。ぞんめいふしやうに候まゝ。そう〳〵まいり候へとのつかひなり。角次郎をぢよめのことなれば。にようぼうに。せつかく留すしたまへ。きしよくくわいぜんするまて。かの地にとうりうすべし。ひのもとよくいゝつけてよなど。いとねんごろらしくいゝをき。かじゅんがもとへいそきける。めぐろへいたりて。かんびやうするかたこゝろにも。おもひいだすは（七ウ）こてうのみ。ひたすらにおもかげわすられず。角二郎がやどにては。にようぼうつく〳〵おもふやう。角次郎どのは。さりとてはきこへぬ人かな。をもきがうへのさよころも。つまをかさねてふたみちに。こてうとやらんいふけいせひに。ふかくあひなれたまふよし。世のきこへもめんぼくなし。留すこそさいわひなれ。こてうと中のとをさかるやうにとおもひ。うたの道もつたなからず。角次郎がにせぶみをしたゝめける

心ならずも一ふで申のこしまいらせ候。このあいだは。かれ〳〵にうちすぎまいらせ候て。わがみ事。あすか川にもなりぬらんと。御うらみのほど。をし（九オ）はかりまいらせ候。さいつごろよりも。こゝちつねならず。うちふしゐまいらせ候が。日をかさね。たのみすくなくして。もはや玉のをもたへなんと。一すじにはちすのうてなを。ねがふのみにて候。わが身此世のなきものと御おもひ。ほとけの御名をも御となへたのみ入まいらせ候。申たきことはやま〳〵なれども。こゝろのみだれがみの。わけてそれともさらなれば。あら〳〵しるにまかせ候。こよなふ御なごりをしく候と。かきてをくに一しゆのうたあり。こてふの三字を句の上において

この世をば。てまくらのゆめと。ふりすてゝ（九ウ）

もろともならて。みつせ川かな

と。取手もくゆるうすやうに。しんしやうにかきしたゝめ。つね〳〵ともする。瀧兵衛をよひ。やまふき色の。ちやうとくちなと。少からすとらせ角次郎殿に。ゆめ〳〵しらせ申なと。くちをかため。右之ふみをこてうがかたへをくりぬ。よのつねの女ならは。あからさまにむ

ねをこかし。ひさげの水はゆとわきかへり。うしのときまいりも。いそでありなんに。さのみねたみの心もなく。このにせふみほどのことは。ことはりとやいわん。けんちよとやいはん。ほんてう女かゝみにも。つうしたるか。てんせいのみちにかなふ（十オ）たるか。むかしりんきの名とり。ふじつほのた□□おんりやうも。このにようほうがまへにては。あさひにこほりならん

二　もろきはさなから。こてうの身の上

なさけをつくし。こひをそへて。かはらぬ中も。あだしのゝつゆと。なりゆくぞ。うき世のゆめぞかし。こてうは此ほど角次郎たへて。をとづれもあらざれば。もしやなさけの。かはりゆくこともや有らんと。こゝろうく。まつ人もなきゆふづくよ。身をしる雨にのきばもる。かけさへうとく。あさゆふわするゝひまも。なきさこく。あまのをぶねの（十ウ）こがるゝのみにて。こゝちもつねならず。かほさう〳〵とをもやせ。かくてはたまのをも。たえなん事もあやうし。かゝるところに。角二郎かたよりとて。文きたる。うれしさもなつかしく。ひらけばみぎのあらましかきつゞれり。こてうは見るとひとしく。こはなにとなりゆく世の中ぞや。かくあるべきとはしりしかど。せめてはこのよのゑん。つきせぬうちに。つゆしうせたまふならば。うきくるわをしのびいで。ともに。ともかくも。なりなんものをと。かきくとき。ひきかついてふししづみぬ。やりてのすぎ。かぶろのみどりなど。いろ〳〵いさめものしけれども。うきに□□（十一オ）

第五図　第六図

挿絵第五図（十一ウ）
挿絵第六図（十二オ）

はなみたにて。その日もすてになきくらし□□□むなしきねやのうちも。うきたちやせん。いま□□ふたりねのまくらも。中よりきりてつきんにもしたし。こてふこゝろをとりなをし。つら〳〵世。の中の。うつりかはるをおもふに。もゑいつるも。かるゝもおなじのべのくさ。いつれかあきに。あはではつべき身なれば。此うへいくよをふりたりとも。何かたのしからん。さぞや角さま。くさばのかげにて。われをおそしと。まちわび給ふらん。このよはかりのやど。らいせでこそ。ちきらめとおもひきり。ひそかにかみそりとりいだし。しばししんぢうに仏をとなへ。ふえをたちやぶつて。むなしくなれり。神ならぬ身のあさましさ。いつわりとはしらつゆの。きゆるたまのをぞあはれなれ。うきふししげきかわたけの。流の女とはいゝながら。かゝるふかきしんぢうのある物かなと。時のぢようらう。しんぢうのかゞみとせしとぞ

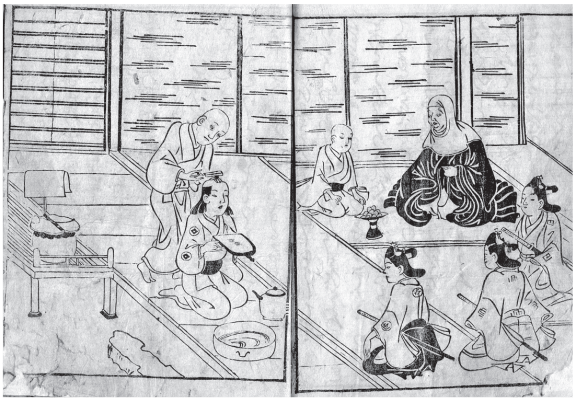
三　うらみくずのはを。落るつゆの身

まことに。世の中ははないろの。うつろひやすき人こゝろ。角次郎いまはますはなありて。にようぼうがことはゆめにもおもひいださす。かりにめぐろにありけるうちにも。ひたすらにこてふがことを。ねごとにもいふほどなり。かくてをぢよめしやう□□（十三オ）日々にくわいきして。いまは角二郎やどへかゑ□女ぼうにをちよめのしやうさんのやうだひ。その外そこ〳〵にあいしらひ。しまふとそのまゝ。はちも人めもいらばこそ。れいの瀧兵衛をぐして。あしをそらさまに。こひしききみにあはんと。こてふがまがきゑといそぎし。かねてかゝるてくだのありと。しらざりしぞはかなき。にようほうこゝろのうちも。をしはかられて。おかしからん。かくてほどもなく。かのさとへいたりて。こてふはととへば。かぶろやりてまじりに。おまへはまことのかくさまでござんすかと。まかほになつていふもいぶかしゝ。一ゑんがつてんがゆか（十三ウ）す。さいふはなにことやらんといゝければ。さればその事。このごろおまへたえ〳〵て。御をとづれもおはしまさず。こてふさまは。それのみあさゆふ。あくかれたまふところに。かくさまよりとて。しか〳〵のたまつさきたりさぶらふゆへ。なのめならずの御なげき。六七日いぜんに。ついにやいばのうへに。むなしくなりたまふ。さても〳〵なした事やら。いつさひかつてんか。まいりませぬはいのと。なく〳〵かたりつゞくれは角次郎はつとおどろき。こはおもひよらずのしだひかな。わがみこと。此ごろちいんのかたにびやうにんありて。十二三日も。かの地に有（十八オ）しがとばかりにて。あるにもあられず。身もだへして。さめ〳〵となきしづみしが。やう〳〵なみだをおしとゞめ。つく〳〵しあんするに。われこのごろ。めぐろにありしうちに。女ぼうめ。さいわひの留すと此さとにしげ〳〵かよひしを。きゝつけて。りんきのあまりに。かくの似せ文を送りし物ならんとおもひ。瀧兵衛をよひ。みぎのわけやしると。たづねければ。ぞんじもよらずといなみけるを。さすが此さとしこなしたる。とをりものゝ事なれは。きいろのちやう。四かくやうのものを。きれきんちやくより。すくなからす（十八ウ）いたし。手ににきらせて。だましすかして。といければ。げらうのあさましさは。このうれしさに。こゝろとられ。くちをかためし事を。うちわすれて。はじめをはりを。のこらずかたりければ。角次郎大にせきあかりて。されはこそとおもひ。大あせになつて。やとへはしりかへり。やかてにようほうか。むなぐらをとつてひきよせ。おのれは。女こゝろて。よくも〳〵しか〳〵のこと。たくみしよな。いまかさいごなる程に。とつくとねんぶつ申せと。せめつけゝれば。女房もさすが。ふゆのゝまくすにて。うらみわひたるありさまにて。さて〳〵こなたは。つれなき人かな（十九オ）

挿絵第七図（十九ウ）

挿絵第八図（十四オ）

よくあんじても見たまへかし。みづからふぎをいたし。よそにこゝろのあるならば。たゝにやみたまひなんや。こなたのやうなる。人でなしの。をつとにそはんより。此世をさりたがましなれば。はや〳〵ころしたまへと。なげきければ。角二郎もとより。よこがみやぶりの。



第七図　第八図

むほうものにて。をのれいまおもひしれと。いゝもはてず。壱尺八寸をもつて。ゆきのごとくなる。むねのあたりを。さしとをす。さしとをされて。きもたましいも。きへ〳〵となりて。はなのすがたも。ちしほにそみわたり。廿一といふには。ついにむなしくなれり。此事となり八けん。きくと（十四ウ）いなや。よもにかくれなく。角次郎江戸のすまゐもなりがたきほどなり。くわんらくきはまつて。あいせいおほきは。世のつねなり。角次郎ほんしんにかへり。つら〳〵こしかた。ゆくすゑをおもんはかつてみづからきうあくをかんがふるに。さて〳〵われは。いかなるくわこのあくゑんにて。かゝるうきめを見る事よ。勿論すじなき事とはいゝながら。二世かけてたのみし。こてふにははなれ。又いもせの女ぼうをば。手にかけてさしころし。世のきこへも。なか〳〵めんぼくなしいわんやぢうざいをや。此うへは七ちん。まんぼうもなにならず。かしらをゑんにし。こゝろをほうにし（十三オ）て。ひたすらに。はかなくなりし。二女があとをとぶらひ。世をのがれんとおもひきり。さしもいみしかりし。いゑざいほうをよそになし。ひそかにそのよの内にしのびいで。あたごの下てんとくぢ。だんなてらなれば。かのちにたちこへ。おしやうにたいめんして。右のしだひをさんげして。ぼだひしんにおもむき候よし。なみだながらに。かたりつゞくれば。おしやううなづき。しゆしやうにこそさぶらへ。もつともかくありたけれとて。さしもきのふけふまでも。ぬれふうなりしせみをれの。あつびんなるを。なさけなくも。そりこぼし。みせばかくそでの。だてなこそでも。すみの（十三ウ）ころもに。そめなしつゝ。だうかんぼうとあらためける。一両日はとうりうして。ぶつだうのをしへを。ちやうもんし。いよ〳〵しん〳〵きもにめいじ。それよりもみやこあんぎやとこゝろざし。あくればねんぶつ一しんふらんにとなへ。くるればさんやをまくらとし。てみる〳〵ゆくほどに。なにしあふ。せいすいしへまふてつゝ。後世をすくひとらせたび給へと。ふかくしんぢうにいのりつゝ。これをはじめとして。けんにんじ。七くわんをん。りやうぜんちをんゐん。あるひはなんぜんじ。くろだに。まことや此ところは。つたへきく。くまがへのなをざね。しゆつけせし所ぞと。（十七オ）いまはわがみにおぼへつゝ。いとゞしゆせうにおもひつゞけ。それよりあけぬ。くれぬとゆくほどに。きしうかうやさんにいたり。かたはらに。かすかなるあんじつをむすび。むかしのさみせんを。かねにたゝきかへ。なげぶしを。ねんぶつにとなへかへ。そらだきの。ゑならぬかほりを。まつかうにふすべかへ。おもへばたのしきも。うつりかはれば。つゐにあだにならしばの。しばのとぼそたけのかきに。むかしのつみをそろしく。あさなゆふなのいとなみには。二女のためとて。一しんふらんの。なまいだ〳〵も。いとあはれにきこへし。たのまれす。は

なの（十七ウ）さかりもひとゝきの。あらしにちりのうき世に。うきたつうわきのかたまり。かくはなりゆく身のはてぞかなしき（□オ）

好色三人紅巻之二三目録

㈠見ると其まゝぬける少人
附思はすも情の雨宿あり
㈡ぬれ帷子は恋のなかだち
附猶ぬれかゝる文は袖にあり
㈢月に村雲花に風の世
附まては甘露の日和あり（一オ）

〔余白〕（一ウ）

一　見ると其まゝぬける少人

恋はさかりに。ふりそてをのみ。見るものかは。さればすじかいばし辺に。松島宮内左衛門といふ浪人あり。もとはさるいゑたかき大名につかへりしが。やうすありて三ケねんいぜんに。いとまをとり。此所にすまゐす。一子に竹之助とて。其とし十六になるあり。きりやう世にこえ。みやびやか也。ひかるげんじは見ぬ世のむかし。まのあたりかゝる美少人もあるものかなと。まばゆきほどなり。むべなるかな。いまなりひらとよばれて。これぞこひぐさのたね。四十五十の女ぼうさへ（二オ）

挿絵第九図（二ウ）
挿絵第十図（三オ）

第九図　第十図

これがとをれば。はしりいで、。子のなくをもしらすましてそのほかの。むすめわかき女などは。うつゝぬかして。ゆめになりとも。此わかしゆをみんことを。思へり。かぞいろのいとをしみあさからず。世のひとのはらからあまたあるにさへ。子をおもふは。なをざりならぬに。いはんや一子形容端正なるをや。あるとき竹之助。ちゝはゝにいふやう。このごろはちつきよいたし。気もつまり候まゝ。けふは浅草のくはんおんへ。さんけいいたしたふそんじまするとて。いへば。ふぼはかわひさに。いかにもまいれとて。をとなしき僮僕二三人つれさせ。くはんをんは。人とをりしげき（三ウ）ほどにうわきらしきものきたるならはよけよなといとこまかに。いゝふくめけるもせつなり。竹之介出立ころしも夏にて。そうちしろのかたひらに五所ぢやうもんの。花輪違を。あさぎいとにてぬわせ。すそよりかたまで。あしのはをうすがきにそめつけ。うすね

すみ色のしゆすのはゞひろのおびを。しどけなくむすびつゝ。しりつきのぼつとりさ。どふもいはれず。けふしも御ゑん日とて。老若のさんけい。ひきもきらず。とんてきらが。のふぬけますは。人ごろしめと。音高にはしたなふ。いふも気のどくさ。いさよひの月にひとしきふり袖に。（四オ）おばゝのこしをかゞめ。つえにすがりて。つきてとをるもおかし。かのふりそで竹之助に。したゝるき尻目づかひも心にくゝ。茶屋のかゝが。たばこまいつてこざんせ。よらさんせのこゑ〳〵かしかましかくて。ほんだうへまふで。まつしや〳〵までおがみめぐり。下向するにおよんで。そらさだめなき夏のおゝぞら。たちまちかきくもり。ふるあめしやぢくのごとく。かみなりはしきりにとゞろきわたれり。快晴をたのみ。からかさかつはもあらばこそ。かたびらもしぼりあへず。しばしは茶屋にたゝずみ。あめのはれまをまちけれどもなをやまず。そのうちに（四ウ）草履取いづかたよりか。かい〳〵しくからかさ一ほんもちきたり。竹之助にさゝせ。本道をとをるに。いかづちはいよ〳〵ひしめき。てんちもくつがへすばかりなり。かくてはかなはせ給ふまじ。いつれの家へなりともすいさんし給ひ。雷雨しづまるまで。御やどりしかるべきなど。めしつれし者共いゝければ。いかにもとて。こまかただうのてまへに。もんがまへのありける家にいり。玄関に指かゝり。われはくはんをん。まふでのものにてさふらうが。途中より雷雨にあひ。めいわくにおよびさふらふ。すいさんながら。晴間まで。貴宅を恩借。いたし（五オ）たくさふらふといゝければ。けんくはんばんのもの。主人へかくとつぐ。主人も仁心ある人にて。それはいたはしき事かな。まづうへゝあげて。きうそくさせませひといゝつけ。主人五十ばかりと見えけるが。たちいでたいめんし。見申せばいまだ御若輩に見へ給ふ。雨のはれさふらふまで。御あしをやすめられ候へ。さて御やどはいづかたにて候。はてよい御きりやうなどて。したゝるき目つきもをとなげなし。竹之助さて〳〵せつなる御心入どもよろこひいりてこそ侍れ。わが身事。すじかいばしのほとりに。まかりありさふらふ。けふしも浅草（五ウ）くはんをんへまふで候ところに。下かうのきざみ道より雷雨にあひ。御やどを見かけしゆへ。すいさんいたし候と。相のぶる。ていしゆ御ちやく候かたひらの。ことのほかぬれさふらふまゝ。申つけほさせ申さんとて。手をたゝけば。あいといふてぼくいでぬれはあのをこのかたびらを。おくにてのさせつ。ほしつなどしてまいらせよ。そのうちおさんがかたびらにてもきせ申せなど。ねんごろにいゝつけて。かつてへいりぬくだんのほくはなやかなる大ふりそてのぢしろに。すそにあさぎにたつなみ。むらちとりを方々へ。べにかのこにそめつけて。五所もんに。もゑ（六オ）

第十一図　第十二図

挿絵第十一図（六ウ）
挿絵第十二図（七オ）

きいとの篠の葉の上に黒糸してこひといふ字をぬひかけゝるをもちきたりてぬれかたびらを取かへてきかへさせける。竹之助おもふやう。今ていしゆがおさんがといゝつ此もようのていを見るに気のとをりたるむすめにやありなんさそや情のみちもあさかるまじ。あはれせめては。ちらとばかりも。ほの見たきと。おもひいりへのあまをぶね。こがれてのみ。恋のなかだちとなれり

三　ぬれかたびらは恋の媒

人の行すゑと。水のながれはしれぬもの。くだんのていしゆは。山尾何某とかやいふて。去西国大名の（七ウ）もとに。者頭して。此地に借宅してすまゐす。彼むすめにおさんとて。名にしあふ月にひとつぞこへしよはひよそをひゆふびに。めんてい柳顔にむつくりとしてどふもいはれず。三十一字にあさゆふたづさはり情のみち千尋はものかは。いか成いなかのあらゑびすも鍬をいだいて赤龍丹を。のみたがらぬはなし。しるもしらぬも恋ごろもうらみわびぬる人のみなりおさんは竹之助が。濡かたびら。をくにて女ども。火にあてほしつ。しきのしするを見ていかなる人とはしらねども。ふり袖のてい何れいろあるかたとおぼへたりとて。最前（八オ）かたびら取かへに出ける。角蔵にひそかにいかなる人にてやある。としはいくつほどに見ゆるなどたつねければ角蔵聞て。ゑもいはれぬやんごとなき御若衆さまにて。としの比をいはおまへさまほどに。みへ侍るといふにぞ。いとゞ心もみたれがみの。分てそれとはいはねども。あはれそのかたさまを一めかいまみたくおもひ。しやうじのすきまよりのぞき見れば角蔵がはなしより。なをみやびやかなりみるとひとしく。おもひいやまさりつゝ。ぢきにいだきつきて。しにたきほどなり。おさんおもふやう。たゞに此まゝやみなんも。ほいなけれ。いか成よすがもあれかし。（八ウ）一ひねりに心の色をと思へども。それさへかなはすあんじわづらひしが。きつとおもひいだして。やがてかたはらの部屋にて。硯をならしておもひのいろを。あら〳〵かきつゞれり。玉づさのわけ。あからさまにはさらなり。はつかしながらみちのくの。しのぶもじすりわれなくは。みだれそめなましものを。心のうち御はかり候て。せめてはいろある御返事。まつのみとかきて。竹之介がかたびら。われたゝまふとて。振そでのうちへ。いとしてぬひつけ。たゝむていにもてなし。角蔵にわたしければ。やがて座敷（九オ）ゑ。もちて出ぬ。ざしきにてはほどふるうちに竹之助申やう。さても浅草のくわんぜをんのはやらせたまひて。貴賤あゆみを。はこぶ事限なし。此尊仏はいづれの世より。此所にたゝせられさふらふぞ。ゑんぎ御そんじ候はゝ。そと御ものがたりうけたまりたくこそ候へと。望ければていしゆ申されけるは。それがしもちかき比。此所へひきこし。まかりあり候へは。くわしくはそんじ侍らずさりながら。此ところの古老一両輩。内外心やすく出入。申もの侍るが。彼者共之。はなし申けるやうを。あら〳〵覚候通語候べし（九ウ）そも〳〵此浅草のくはんぜをんの。ゑんぎをたづねたてまつるに。いにしへ此あさくさ川をば。宮戸川と申て。漁父のあつまるところ也。しかるにすいこてんわうの御宇に。進中臣といふ人有。少あやまれる事有て。此ところへ流人と成てありしが。

かれがらうどうに。ひのくま。はま成。たけなりとて。きやうだい三人のもの。主人の跡をしたひて。爰にたづねきたり。みやづかへすなどりをして。主従のいとなみを送りしに。推古三十六年。つちのへ子。三月十八日の事成に。きやうだい三人のもの。あみをもち。ふねにさほ（十オ）さして。みやと川の沖にこぎいだして。あみをおろしけるに。うほさらになし。あなたこなたとこぎめぐり。あみをおろしけるに。七度まであやしきものかゝりぬ。ふしぎにおもひ。月の夜陰に。見たてまつれば。くわうみやうかくやくたる。御仏躰くわんぜをんにておはします。兄弟三人大きにおどろき。手を合らいはいし。かりに草屋をしつらひてあんちせしが。此辺の草かり十人。ともなひきたり。かの草屋より。金色のひかりさしけるをみて。終に見なれざるくさやに。くはうめう。かくやくこそあやしけれ（十ウ）とて。おがみたてまつれば。たつときくわんをんの御仏躰也。これはいか成人のわざやらんと。あやしみける所へかの三人のもの共来りて。かやう〳〵のやうすと。くわしくかたりければ。いよ〳〵たうとみをの〳〵心をひとつにして。わづかの御だうをとりたてけると也。今にいたりて。兄弟三人を三所之護法とあがめ。又十人のくさかりを。十社権現といわひ奉る也。さてはじめてくさやをたてし所にも宮をたて。一のごんげんと申也。しかるに孝徳天皇の御宇。大化元年に。勝海上人。此地にまうで。きどくのつげおはしましけるより（十一オ）

挿絵第十三図（十一ウ）

挿絵第十四図（十二オ）

此かた。御本尊をぢきにおがみたてまつる人なし。朱雀院の御宇。

第十三図

第十四図

天慶五年に。安房守平公雅。このくわんをんにいのりて。所願をまんぞくし。くにの守になりて。官位たかくのぼりしかば。其よろこびに。くわんをんだうを再興し。かたはらに又。仏堂をたて。輪蔵を作り。院坊をたて。五重の塔をつくり。鳧鐘を鋳てたかく。一楼にかけらるゝ。鯨音とをくひゞきては。きく人無明のねぶりをさまし。参詣礼拝のともがらは。福寿海無量の。利生をかうふる事。鏡にかげのうつるがごとし。それよりのち。或はぢしん。或は兵火にて（十二ウ）度々堂塔破壊すれとも。さいかうたび〳〵なり。源のよりとも卿は。三十六町の神田をよせられ。足利の尊氏公。又寺領をよせられけるとなり。其外代々の武将。御崇敬あさからず。取わけ当御代の御元祖　東照大権現様。御信心あさからざりし。御仏像にておはします也と。ことばに花をさかせ。委細にかたりをはれば。彼角蔵かたびらを。竹之介か前へさし出す。竹之介よろこびきかへ。ていしゆへの謝礼よきほどにのべ。雷雨もしづまれば。ぼくうちつれ。道すがらもかのおさんが事のみ思ひつけ。すじかいばしへ（十三オ）おもむきける。竹之介がたらちねは。雷雨

をかなしみむかひにとて。くわんをんの地内まで。からかさかつをもたせ遣しぬ。方々たづねまはれども見らねば。是非なくやどへかへりかくといへば。神ならぬ身のかなしさは。大きにをどろきなげき。めもあてられぬさまなりし所へ。竹之助かへりきたれは。たらちねはぢごくにて。ほとけにあふたる。こゝちしてよろこび。御身はいづかたにありければ。観音の地内まで。むかひをこしけるが。かつて見へすとてかへりしゆへ。大にきづかひしたりといへば。竹之助さこそ候はんずれ。こまかただうのへんの家へ推参（十三ウ）いたし。雨やどかりさぶらふところに。しか〳〵の心いれにて。亭主のかいほうにあづかりさふらふと。くはしくかたり。わがへやへゆきて。袖のうちを見れば。一ふうのふみ。いとしてぬひつけてあり。竹之介もさすがの通りもの。去事やあるべきとて。いそぎひらき見れば。御しんのほども御はづかしながら。ほのみしよりのかきはじめ。やまとことばのゑひの色もふかみどり。まつをしぐれのそめかねての。古哥まじり。とかふはもたれがましくざつと留まいらせ候と。かきつゞけたる筆のすさひ。見るとうれしさかぎりなし。しかじ此事成就（十四オ）すとも。他へもれきこへなば。おやのいさめ世のそしり。身をなげかまじとおもひ川。ふかきおもひのたまづさを。すてゝもおかれす。とればおもかげにたちそひて。とやせんかくやあらんと。進退爰にきはまりしが。よく〳〵思ふに。わざくれ此恋ゆへ。うきめにあふとも。君がためをしからざりし命。つゆばかりも。いとはぬものをと思ひなをし。くたんの返事をしたゝめける。思ひかす〳〵かきあらはし。神ばかりかは。仏もおやもとの御ちかひ。数ならぬしづの身を。かくまであくがれ給ふとの御いはせ。こよなふ御うれしくおもひまいらせ候。ぬれぬ先こそ（十四ウ）露をもいとひ候はん。よしや一夜の新まくら。情のよそへきこえつゝ。きみもろともにきへらん命。なにかをしく候はん。しかじあふさきるさの人目のせき。いかゞはしてしのびさふらはん。此御返事に。待入まいらせ候とかきて。最前ともしたる折介にもたせ遣しぬ。さすがこのやうなるしよわけに。あたりつけたりと。おぼへてこゝろきゝ。おさんさまのおこしもとをよび出し。彼玉づさをわたしければ。なに事とはしらねども。すなはちうけとりておさんに見せければ。こひこがれてありけるをりから。とるてにたへずひらき見れば。思ふまゝ（十五オ）のふでのすさみ。うれしさ又はこしもとの見るまへのはづかしさに。かほにもみぢをちらし。さしうつむいてぞ居たりける。やなは見るよりもいかなる御事やらん。いぶかしくこそといへば。なをもはづるありさまにて。ちつとしたものじやといふて。かの玉づさをふところへをしいれ。さらぬていに。いゝまぎらかしけり（十五ウ）

〔解題〕

一　書名について

本稿では架蔵本『好色三人紅』と『好色三人もみぢ』（仮題）を翻刻したが、両書の関係と書名について説明しておきたい。

〔書誌〕の『好色三人紅』「余説」に記したように、『好色三人もみぢ』は『好色三人紅』巻一の後印修訂本であることが予想される。堤氏はご架蔵の『好色三人紅』巻一・三の内容を次のように紹介された（傍

線を私に付す。以下同じ）。

ここに浮世草子の一例として『好色三人紅』を紹介したい。架蔵本は半紙本の、巻一・三の端本であるが、他に完本の存在を知らない。序に

……小帖五巻につゞれり。何の人の作と云事を不レ知（ママ）

とあることから、全五巻五冊であることがわかる。巻一には湯島の辺に住む大和屋九郎右衛門の男角治郎が、父の死後吉原に遊び遊女小蝶と深い仲となるが、女房の悋気によって小蝶を失い、怒って女房を刺し殺して、発心し諸国行脚に出るという筋立てである。巻三は、巻二の話を受けているらしく、前半の部分が不明であるが、要するに竹之介とおさんという若い男女が恋に陥り、しかも双方の親が許さないので、竹之介の旧友で野州壬生の太守に仕える黒川盛之進を頼って馳落ちをする。やがて盛之進の尽力で二人はめでたく結婚することができるという話である。『三人紅』という題名から考えて、巻四・五に、さらに一組の恋愛が語られるのであろう。内容すべて江戸の話であり、竹之介おさんの馳落ちは、江戸から壬生への道行文になっている等、江戸で作られた浮世草子であろうが、『好色江戸紫』のように初期のものではなく、各巻章題の付け方等に西鶴模倣の跡がうかがわれる。おそらく『好色五人女』等を手本としたものであろう。

登場人物の漢字表記等に若干の相違は見られるものの、巻一の内容を示す傍線部が『好色三人もみぢ』と一致し、また巻三を紹介する波線部が架蔵本『好色三人紅』巻二の内容と連続するものであることは明らかであろう。

架蔵本『好色三人もみぢ』は改装された後印修訂本と目され、原題簽や内題・柱題等が確認されないため、『好色三人もみぢ』はあくまでも仮題ではあるが、それが堤氏の『好色三人紅』巻一に相当することが予想され、さらに架蔵本『好色三人紅』と『好色三人もみぢ』の版式や画風も共通する。本稿においてそれらを『好色三人紅（好色三人もみぢ）』（巻一・二）として扱った所以である。

二　本書の内容構成について

堤氏がわずかに紹介された『好色三人紅』の序からは、本書が元来五巻五冊本であったことが窺えるが、当該書は現行の目録・データベースはもとより、当時の書籍目録や種彦の『好色本目録』等にも容易に見出すことはできず、その巻四・五の刊否は不明である。ただし、架蔵本や堤氏蔵本、歴彩館本の書誌や内容から、次のような巻構成が推測される。

○初印本『好色三人紅』（半紙本五巻五冊、序・目録あり）

巻一　角次郎と小蝶の話（三章）
巻二　竹之介とおさんの話（二章）
巻三　竹之介とおさんの話（一章）
巻四・五　男女の一話（全三章カ）

○後印修訂本『（書名不明）』（半紙本五巻五冊または三巻三冊、序は改題のため欠丁カ、目録題・柱題削除）

巻一　同右（三章）

巻二　同右（二章）

巻三以下の刊否は不明。ただし、歴彩館本の裏見返しの書き入れから、遅くとも延享四年六月以前には刊行されていたことが予想され、その際、上中下三巻『好色三人もみぢ』と改題された可能性もある。

三　刊行年代について

穎原文庫本には穎原氏による書き入れがあり、当該書の内容上の特徴や刊年について次のように述べられていた（重出）。

竹之介トイフ美少年トおさんトイフ娘ノ恋物語ナリ、本書ハソノ第一巻トオボシ。中ニ浅草観音ノ縁起ヲ事長ク説クナド単純ナル浮世草子トハ思ハレズ。或ハ浮世草子ノ趣向ノ間ニ観音ノ霊験、艶書ニ事ヨセ古歌ノ智識ナドヲ教ヘントスルモノニ非ルカ。刊行年代ハ元禄宝永ノ交ナラン。

本書の特徴として、浅草観音の縁起が長く記されていることが指摘されるが、事実該当箇所は一巻全体のおよそ四分の一の分量を占める。少し長くなるが、適宜省略しながらその全体を示しておく。

『好色三人紅』

そも〳〵此浅草のくはんぜをんの。ゑんぎをたづねたてまつるに。いにしへ此あさくさ川をば。宮戸川と申て。漁父のあつまるところ也。しかるにすいこてんわうの御宇に。進中臣といふ人有。少あやまれる事有て。此ところへ流人と成てありしが。かれがらうどうに。ひのくま。はま成。たけなりとて。きやうだい三人のもの。主人の跡をしたひて。爰にたづねきたり。みやづかへすなどりをして。主従のいとなみを送りしに。推古三十六年。つちのへ子。三月十八日の事成に。きやうだい三人のもの。あみをもち。ふねにさほさして。みやと川の沖にこぎいだして。あみをおろしけるに。うほさらになし。……しかるに孝徳天皇の御宇。大化元年に。勝海上人。此地にまうで。きどくのつげおはしましけるより此かた。御本尊をぢきにおがみたてまつる人なし。朱雀院の御宇。天慶五年に。安房守平公雅。このくわんをんにいのりて。所願をまんぞくし。……源のよりとも卿は。三十六町の神田をよせられ。足利の尊氏公。又寺領をよせられけるとなり。其外代々の武将。御崇敬あさからず。取わけ当御代の御元祖　東照大権現様。御信心あさからざりし。御仏像にておはします也と。ことばに花をさかせ。委細にかたりをはれば。

（巻二―二）

右の縁起では推古天皇から孝徳天皇・朱雀院、さらに武家方の頼朝・尊氏・家康時代のことが一連のこととして語られるが、それらにはすべて典拠が指摘できる。貞享四年六月刊『古郷帰の江戸咄』（画・本文作者不明、「貞享四丁卯歳／六月吉旦／山下彦兵衛／簾翠屋仁兵衛

／鎰屋平右衛門」）である。

『古郷帰の江戸咄』[1]

抑此観世音の縁起をくわしく尋奉るに。いにしへ此浅草川をば。宮戸川と云て。漁夫のあつまる所也。然に推古天皇の御宇に。進中臣と云人有。少あやまれる事有て。此所ゑ流人と成て有しが。彼が郎等に。檜熊。濱成。武成とて兄弟三人の者。主人の跡をしたひて。此所へ尋来り。見やづかへすなどりをして。主従のいとなみを送りしに。推古卅六戊子年三月十八日の事なるに。兄弟三人のものあみをもち。舟にさほさして。宮戸川の沖にこぎいだして。網をおろしけるに。魚更になし。……

○孝徳天皇。大化元年に。勝海上人此地にもうで。奇特之告おわしましけるより此かた。御本尊を直に拝み奉る人なし。

○朱雀院御宇。天慶五年に。安房守平公雅。此観音に祈りて。所願を満足し。……源頼朝卿は。三十六町の神田をよせられ。其後足利の尊氏公。又寺領を寄られけると也。其外遠くは。田村将軍。新田義貞公。ちかくは権現様を初奉り。代々の武将。御崇敬あさからざりし御仏像にてまします也

（巻五上―六「浅草寺の観世音」）

『好色三人紅』には漢字表記が仮名に変更されるなど、好色本（浮世草子）の読者層を意識したと思われるような改変が施されてはいるが、『古郷帰の江戸咄』の記事を編集してほとんどそのまま使用していることは、各傍線部以下の対応箇所を見ても明らかである。『古郷帰の江戸咄』は寛文二年五月刊『江戸名所記』（画者未詳、浅井了意作、「寛文二暦壬寅五月日／板本五條寺町／河野道清」）、延宝五年二月刊『江戸雀』（菱川師宣画、近行遠通作、「延宝五年丁巳仲春日／江戸大伝馬三丁目／鶴屋／喜右衛門板」）を原拠としたことで知られるものの、例証は省略するが、『好色三人紅』はそれら二書の記述とは違い、細かな表現まで『古郷帰の江戸咄』と一致する。

この事実は単に『好色三人紅』の典拠指摘に止まらず、その成立や刊行年代を推定する大きな手掛かりとなる。『古郷帰の江戸咄』は貞享四年の初印本刊行以降、一部改刻増補されて元禄七年に再印され、その後無刊記本も刊行される。[2] 先に示した浅草観音縁起に関する記事について、元禄七年刊本以下の諸本においても改刻・増補が行われていないため、どの刊本を参照したのかは即断できない。しかし、『好色三人紅』の刊行が早くとも『古郷帰の江戸咄』初印本刊行以降であることは確定できよう。

浅草観音の縁起に関しては、土佐浄瑠璃「浅草観音縁起」（正本の刊年未詳、木下甚右衛門板）が知られるが、次にその由来を語る詞章を少し挙げておく。[3]

そも〳〵、浅草。観世音の、ゆらいを。尋奉るに。比は仁王三十四代。すいこ天わう三十六年。戊子三月ッ十八日に。武州豊嶋の郡入ル間の郷に。しんの中臣と云者有。観音さつたの誓願を、深く。頼みてしんかうし。いへの子濱成竹成友成兄弟。三人を召つれ入間川

に。一やうの。舟をうかへて夕なぎに。釣をたれんと出けるに折
からなみも。しづかにて……

本曲は同じく土佐節の「三世二河白道」（正本は宝永五年七月、木下甚右衛門板）の第五章を利用したものであることが指摘されるが、[4]右に明らかなように、それを『好色三人紅』の典拠と見なすことはできない。ただし、土佐節では早く寛文頃から浅草寺の観音縁起が語られていたことが推測されており、[5]寛文～宝永期の江戸において、観音縁起に関する人々の関心やニーズがある程度広まっていたことは記憶されてよかろう。さらにそうした流行に前後して、江戸名所案内記の記念碑となる『江戸名所記』が誕生する。『江戸名所記』は京都板ではあったが、『江戸雀』『古郷帰の江戸咄』へと続く江戸板名所記ブームを呼び起こすことになるが、『好色三人紅』が『江戸名所記』ではなく『古郷帰の江戸咄』を使用していたことは、江戸板すなわち地本としての好色本浮世草子『好色三人紅』の性格を物語っているようである。

そうした中で浅草観音縁起に関する最古の絵入版本と目される『浅草観音伝記』（刊記不明）が元禄初年頃に刊行される。[6]例証は省略するが、本書もまた『好色三人紅』の典拠とすることはできないものの、元禄初年頃に浅草観音縁起に特化した絵入版本が刊行されていた事実は注目すべきことである。本書には画・本文作者の記名はなく、画者については菱川師宣とされることもあるが（『国書総目録』）、根拠は不明である。近時では画・本文作者ともに石川流宣であることが推測されているが、流宣は絵師としては師宣の門下であった。流宣は貞享元年三月に江戸板浮世草子の嚆矢となる『下谷桂おとこ』（「松会開板」）を刊行したことでも知られるが、自身が手掛けた元禄二年刊『江戸図鑑綱目』（「元禄二己巳天初春／書林／江戸／相模屋太兵衛」）には次のような記事が見られる。[7]

廿五　浮世絵師（諸師）
橘　町　菱川吉兵衛師宣
同　所　同　吉左衛門師房
廿六　板木下絵師[8]
長谷川町　古山太郎兵衛師重
浅　草　石川伊左衛門俊之
通　油　町　杉村治兵衛正高
橘　町　菱川作之丞師永
十五　地本屋（諸商人無類之分幷本屋家書）
長谷川町　松会三四郎　往来物
大伝馬町三丁目　山本九左衛門　浄瑠璃本
同　町　鱗形屋三左衛門　同断
通　油　町　鶴屋喜右衛門　同断
同　町　山形屋市郎右衛門　同断

貞享四年刊『江戸鹿子』（「貞享四年仲冬日（跋）／江戸京橋南新両替町／書林　小林太郎兵衛」）では「地本屋」は立項されておらず、

右の五店はすべて「浄瑠璃本屋」として立項・掲載されている。そのことは元禄初年前後に「地本屋」なる新たな概念が顕在化してきたことを示唆するが、まさにその頃『古郷帰の江戸咄』『浅草観音伝記』が刊行されたことになる。『好色三人紅』において特徴的な浅草観音縁起の語りも、そうした江戸の流行や出版界の動向において再び眺め直す時、じつに時宜に適った趣向であったことが了解されよう。堤氏によって『好色五人女』（貞享三年二月刊）の影響も指摘される『好色三人紅』ではあるが、江戸板の好色本浮世草子を新たに企画しようとする本屋にとって、貞享末・元禄初年頃は西鶴本の新味を活かしながらも地本屋としての江戸のニーズ（師宣風の挿絵や板式などのモノとしての本のあり方も含む）に応える最適な時期であったことが窺える。

また、本書には当時の風俗・流行を示す次のような記述も見られる。

さのみねたみの心もなく。このにせふみほどのことは。ことはりとやいわん。けんちよとやいはん。ほんてう女かゝみにも。つうしたるか。てんせいのみちにかなふたるか。（巻一―一）

さしもきのふけふまでも。ぬれふうなりしせみをれの。あつびんなるを。なさけなくも。そりこぼし。みせばかくそでの。だてなこそでも。すみのころもに。そめなしつゝ。（巻一―三）

右の「ほんてう女かゝみ」は寛文元年九月刊『本朝女鑑』（「寛文元年辛丑九月吉旦／寺町誓願寺前町／西村又左衛門」）のことと思われるが、本書は求板（「寛文元年辛丑九月吉旦／椹木町／吉田四郎右衛門板刊」）され広く流布するのみならず、寛文十年正月には『名女物語』と改題・改刻された江戸の松会板が刊行され、同年五月に山本九左衛門に求板された後、さらに天和二年二月に『日本名女咄』と改題されて木原次郎右衛門から出版されるなど、貞享前後の江戸の女訓物ブームの火付け役となった一書であった。また、「ぬれふうなりしせみをれ」とある「せみをれ（蝉折）」は天和頃から江戸において流行した男の髪型で、元禄初期には上方においても男伊達の風俗として認知されていたようである。[9]

こうしたことから本書の出版は貞享末・元禄初年頃と推測してよさそうであるが、遅くとも顕原氏が推測された「元禄宝永ノ交」を下ることはなさそうである。

注

（1）『近世文学資料類従　古板地誌編10』（勉誠社、昭55）。
（2）注（1）安田富貴子氏解題。
（3）『土佐浄瑠璃正本集　第三』（角川書店、昭52）。
（4）注（3）所収、鳥居フミ子氏「解題（「浅草観音縁起」）」。
（5）注（4）に同じ。
（6）吉田幸一氏「解説（「浅草観音伝記」）」（『石川流宣画作集下巻』古典文庫、平7）。
（7）注（6）所収。

（8）立項は初版本による。

（9）金沢康隆氏『江戸結髪史』（青蛙房、昭43〔新装版〕）。また『日本国語大辞典　第二版』（第七巻）には、貞享頃成立『天和笑委集』（巻八「不忍新道名所物語」）や元禄七年七月刊『好色万金丹』（巻二―二）の用例が記されるが、初出例として挙げられる『天和笑委集』が江戸の風俗を写したものであることに留意したい。

（二〇一九年十月一日受理）

（ふじわら　ひでき　文学部日本・中国文学科教授）

参考文献

拙稿「潁原文庫蔵『逸題浮世草子』とその周辺」（『国語国文』八十八巻十二号、令1・12）。

本稿〔解題〕はその性格上、右の拙稿に多く基づく。

本研究はJSPS科研費17K02458の助成を受けたものです。